

論文の内容の要旨

論文題目 流通論の展開——余剰の政治経済学

氏 名 沖 公祐

マルクス経済学にとって、余剰を理論的に解明することはもっとも中心的な課題のひとつである。そして、この課題は、労働力の商品化を説いたあとの生産論において果たされる。そこでは、余剰は、労働力の価値と労働力の形成する価値の差額、すなわち、剰余価値として捉えられる。

余剰を剰余価値として説明するという目的意識は、生産論に先行する流通論においては、逆に、余剰の問題を徹底して排除するという効果を伴った。このことは、市場の理解に対し、また、延いては、資本主義の理解に対し、無視しえぬ影響を及ぼしているように思われる。本稿では、流通論のなかに余剰の問題を積極的に導入することによって、従来のような〈剰余価値の経済学〉ではなく、〈余剰の政治経済学〉を構築することを試みる。

第1章「流通における余剰」

剰余価値の生産に還元されえない流通における余剰を考察することによって、従来の市場観を刷新することを試みた。

第1節では、まず、マルクス以前の学説に遡り、欲求と欲望の区別から交換に対する二つの捉え方が生じたことを概観した。二つの捉え方とは、欲望に基づく奢侈=交換論（ヒューム）と欲求に基づく必要=交換論（スミス）である。

第2節では、マルクスの交換論を検討した。マルクスはスミスの必要=交換論を批判するために、商品・貨幣論を単純商品流通として展開した。このことがマルクスの所説に与えた歪みを指摘したうえで、余剰=交換論（ロック）を参照することによって、それを修正しうることを示唆した。

第3節では、単純商品流通を前提しない商品論を構築することを試みた。単純商品流通を想定することによって、スミスの貨幣発生論と同じ困難に陥る可能性があることを指摘したうえで、単純商品流通に基づく分裂の論理によってではなく、余剰=交換論に基づく展開の論理が採られるべきだと主張している。

第2章「貨幣機能の二重構造——価値尺度と流通手段」

これまで貨幣論研究において殆ど取り扱われてこなかった貨幣諸機能間の関連の問題を、

価値尺度と流通手段の二機能に焦点を絞って考察した。

第1節では、価値尺度と流通手段の関連の考察に先立ち、価値形態論的視角から価値尺度機能が検討される。価値尺度における表現の機制とそれに伴う取り違えによって、貨幣の使用価値は価値の形態として現われるようになる。価値尺度としての貨幣は、有用性を齎すところの自然的諸属性に加え、形式的使用価値という社会的属性を備えるが、このことを素材性 *Materialität* という概念を用いて説明した。

第2節において、価値尺度と流通手段の関連が討究される。まず、宇野弘蔵の価値尺度論の検討を通じ、それが価値尺度と流通手段を関連づけるの一つの方向を示す一方で、铸貨・価値章標の理解を困難にするという別の問題を孕んでいることを指摘した。そのうえで、マルクスの二機能の対蹠的把握、価値尺度の観念性と素材性、流通手段の実在性と非素材性に着目し、二機能が代表 *Vertretung* の機制によって接合されることを明らかにした。価値尺度の観念性はその素材性が別の素材（流通手段）によって代表されることを可能にする。さらに、流通手段が価値尺度における表現の機制を代表することによって、貨幣の二機能は入籠状の二重構造をなすことが示され、また、取り違えも二重に生じることが指摘される。

価値尺度と流通手段の代表関係の成否に信頼 *Vertrauen* という要素が介在することを確認したうえで、第3節において、貨幣における信頼の問題が検討に付される。まず最初に、代表に対する信頼が本来的に偶有的なものであることが明らかにされる。それと同時に、代表の機制が信頼の対象にずれを引き起こすことが指摘される。さらに、貨幣には代表に対する信頼とは異なるもう一つの信頼、すなわち、貨幣価値に対する信頼が存在するが、価値表現の機制に由来する貨幣価値の知悉の困難性のために、その信頼は容易に成り立たない。しかしながら、高く売って安く買うという市場における行動原理が、貨幣価値に対する信頼を結果的に成立させることが明らかにされる。

第3章「蓄蔵貨幣の形成と資本の運動」

蓄蔵貨幣 *Schatz* 概念は、これまで貨幣理論のなかで必ずしも積極的な位置を与えられてこなかった。この章では、蓄蔵貨幣を貨幣の資産性として捉えなおす一方で、それが資本の運動の解明に重要な視座を与えるものであることを明らかにした。

第1節では、マルクスがもともと無政府的な市場観をもっていたこと、しかしながら、貨幣数量説を批判するという目的のために、『資本論』では、この見方が消極化することになったことを指摘した。また、これに伴い、蓄蔵貨幣概念も軽視されることになった経緯を説明した。

第2節では、マルクスの蓄蔵貨幣概念のもつ限界を示したうえで、その積極的な内容を貨幣の資産性として捉え返した。さらに、貨幣の資産性が商品一般の資産性とは区別される特殊性をもつことが指摘され、余剰が貨幣として市場の内部に積極的に形成されること

が明らかにされた。

第3節では、余剰としての貨幣が滞留する市場の特性が探られる。すなわち、貨幣滞留のある市場は、価格のばらつきが時間的にも空間的にも生じるような不均質な構造をなしている。この市場の不均質性と余剰としての貨幣の存在が、資本の運動を可能にし、収益性という資産の新たな側面を展開することが明らかにされる。さらに、資本の運動は、労働力商品化を通じて生産を包摂するようになるが、そこにおいても、流通と生産の間には断層が存在することが強調される。

第4章「労働力商品化の多型性」

労働力商品論は、マルクス経済学固有の資本主義理解をもっとも集約的に表わしている。近年、この労働力商品論に対し、様々な角度から批判が寄せられている。本稿は、労働力商品論が限界をもつことを認めつつも、労働力商品の外部性というマルクスの基本的視角をきわめて重要なものだと考える。従来の労働力商品論の難点は、労働力をはじめから単一型にはめて理解してきたところにある（労働力の単一化論）。この論文では、労働力商品化の多型性をこれに対置することで、労働力商品の外部性というマルクスの視角を活かす方途を探った。

まず、第1節で、マルクスの労働力商品論には、もともと労働力の単一化論とは別の理論的可能性も存在していたことが確認される。しかし、〈二重の意味で自由な労働者〉として表現される労働力単一化論の方が、プルドンに対する批判意識も相俟って『資本論』で前面化してくることになる。このことはマルクスの労働力商品論のみならず、資本主義把握に対しても限界をもたらすことになった。

第2節では、労働力に関する二つの単一化論（〈再生産〉過程の単一化論と労働過程の単一化論）が『資本論』の労働力の価値規定に与えた負の影響を考察した。マルクスは、資本主義的人口法則によってマルサス人口論を批判しながらも、古典派賃金論（労働力商品の価値規定）を受け入れたことによって、論理的な齟齬を抱え込んでしまった。マルクスのマルサス批判を完遂するためには、労働者およびその子供の生活手段という労働力価値の規定は再考されねばならない。また、養成費規定も、労働過程と熟練形成との関係を見捨てる労働過程の単一化論に陥っており、徹底的な再検討に付される必要がある。

第3節で、労働過程の単一化論の見直しを図る。『資本論』の労働過程論の検討を通じて、労働における熟練の契機を析出した。熟練には、横と縦の二つの方向性があり、また、熟練の対象も生産手段（労働手段・労働対象）と人（協働者）とに分かれる。

第4節では、熟練がもたらす労働市場の分化を考察した。まず、縦横両方の全面的熟練を要する労働過程に対しては、高賃金で流動性の高い自立的労働市場が形成される。縦のみの一面的な熟練に依存する労働過程では、継続的な雇用を結ぶ相互依存型労働市場が求められる。労働過程の細分化によって不熟練化が進行した場合には、短期的できわめて低

賃金の従属型労働市場が成立する。